

# 子ども人間工学の諸課題

子どもの人間工学委員会をまとめて

小松原明哲

子どもの人間工学委員会



# 委員会の目的

- これまでの人間工学において「子ども」が抜け落ちていたのではないか？
- 子どもを前提とした人間工学の課題を広範に調査、整理する。
- 2009年戦略委員会の分科会として発足
- 2010年から委員会として活動

# 活動 MLとWG

- 日用品・製品安全WG:日用品や子ども用品の使いやすさや、製品安全を検討する
- 保育/教育WG:母子関係、保育環境などにおける課題を検討する
- 遊び場設計・遊具安全WG:遊び、遊具等による、安全で健全な心身の発達を検討する
- 防犯WG:地域環境などにおける、子どもの防犯、社会安全の側面を検討する
- 生活環境WG:IT環境など、生活における子どもの生活変化と発達について検討する



MLでは正直、議論が盛り上がりませんでした……。

# 活動 シンポジウム・企画セッション

- 2010年6月 第51回大会（北海道大学）  
「子どものために人間工学が出来ること」
- 2010年12月 関東支部第40回大会（東海大学高輪校舎）  
「子どもを育み育てる人間工学」
- 2011年6月 第52回大会（早稲田大学）  
「少子超高齢社会における子ども人間工学の課題」
- 2011年12月 関東支部第41回大会（芝浦工業大学）  
「子どものための人間工学」
- 2012年6月 第53回大会（九州大学）： 今回  
「子ども人間工学の諸課題」



参加者も徐々に増え、活発な意見交換がなされました。

# 明らかとなったこと

## 【人間工学研究上の問題】



- 「子ども」を「子ども」とひとくくりには出来ない。
- 「モノ」との関係を、ある静断面でのみ議論が出来ない。
- 子どもの関係する「モノ」の形態が多様。設計の考え方が異なる。
  - “子ども用製品”
  - “子どもが使ってはいけない製品”
  - “子どもも大人も共用する製品”
- 設計に役立つ子どものデータが乏しい、データ取得が困難。
- 「モノ」が子どもに適しているかの科学的測定が困難。
- そもそも、「モノ」が子どもに適しているかを、どのような指標で評価するのか不明。評価の思想的な合意形成が必要。
  - 「学習容易でよいのか?」「擦り傷で育つ安全とは?」

# 明らかとなったこと

## 【ステイクホルダーが多く、かつ偏る】

- 「モノ」を購入し、子どもに与える保育者の養育態度、養育行動の影響を抜きに議論が出来ない。保育者の啓発が必要。
- 保育者とその生育過程において、子どもと触れる機会が乏しい。その結果、子どものことを知らないままにいきなり保育者となることが多い。
- 社会の関心が薄い。子どもを養育中の成人の関心は高いが、そうではない世代の関心は極端に薄い。
  - (例1)「公共の場」においてのバリアフリー、UDは進んでいるが、多くの場合、子どもは想定されていない。
  - (例2)都市部で冒険児童公園を設置しようとする、「騒音問題」から検討を始めなくてはならない。



# 提言

## 「子どもの人間工学」を行う場合 研究者は、その立ち居地を明らかとすべき

- 対象年齢児を明らかとする
- 対象とする「モノ」は、“子ども用製品” “子どもが使ってはいけない製品” “子どもも大人も共用する製品”のどれに該当するのかを明らかとする
- 何を持って適合性を評価するのか、その評価指標や、評価の視点、評価の価値観、スタンスを明らかとする
- その設計を行うことで他の年齢児や他の世代にどのような影響、効果が将来を含めてもたらされるのかを明らかとする
- ステイクホルダーの定義と、それに対する啓発などの働きかけの必要性を明らかとする



# おわりに。

- 子どもの人間工学の問題は、人間工学の全ての領域が関係している。
  - ある意味、「子どもの人間工学」は存在し得ない。
- それぞれの研究のご専門から、子どもに対してのご関心、関わりをお持ち頂ければ幸いです。

